

昭和48年～（1973～）

益高経理科の下剋上

飛騨から全国へ名乗りをあげた経理科は、簿記で日本一となり、数多くの経理のプロを輩出しました。

経理科の躍進

昭和四十八年に商業科に小学科制が導入され、商業・経理・事務の三科が誕生しました。経理科は簿記に特化して徹底した教育をおこない、全国簿記大会での優勝や、大卒レベルの資格である日商簿記一級の大量合格、卒業生から税理士・公認会計士を数多く輩出するなど「経理の益田」として全国に名を馳せました。

草創期の経理科 全国高校簿記大会初優勝

このような大会に参加をしたきっかけは蓄えた実力を試すことでした。飛騨の中だけでは益高生の自信を生むことは期待出来そうもないので、思い切って東京へ出て実力を試してみましたが、意外にも初参加、初優勝の感激を味わうことが出来ました。小学科制をとって二年目の経理科として一番欲しかったのは、将来への自信でした。実力ナンバーワンの静岡県に勝ったのですから、全国一位と言っても過言ではないでしょう。益高を見直してもらおう為には、やはり学力でもズバ抜けた実力をもつことでしょうか。経理科の生徒が連日のコツコツとした努力を東京の舞台で発揮できたことは、益高の名を上げることには一役買うことにも成ったでしょう。総合の部、個人の部ともに素晴らしい成績を残しました。

（教諭 森均）
育友会報「広報ました」より

全国最年少で 公認会計士試験合格

益田郡萩原町の県立益田高校の経理科は簿記を中心にした優れた教育を実践していることで有名だが、今回二年前に卒業した同科の生徒が公認会計士の試験に合格した。国家試験の中でも最難関といわれ、東大や一橋大などのトップクラスの学生たちが大学卒業後に頑張ることで、素晴らしい快挙と話題になっている。

益田高校経理科は、日本商工会議所の簿記検定一級試験に、ここ三年間で二十一人の合格者を出し、この中からさらに難関の税理士試験合格者を大量に出している。昨年は簿記のインターハイとして知られる全国高校簿記競技大会で七年連続優勝の偉業も成し遂げたほどで、全国的にも有名になっている。

今回、公認会計士の試験に受かったのは、五十四年に卒業した小坂町出身の江原吉一君。江原君は経理科の優秀な生徒で、在学中に日商簿記一級などを取り、卒業後東京の専門学校へ通い、公認会計士を目指して猛勉強を重ねてきた。国家試験の中では一番難しい試験で、大卒者の合格は普通だが、江原君のようなケースは珍しく、試験合格者としては全国で最年少ではないかという。こうした快挙について、同校では目標や特色をしっかりと打ち出せる小学科制を採用、職業科のなかでも経理科を独立させたためとみている。もちろんこれには先生たちの熱心な教育ぶりが目につく。

大学進学者が増えているなかで、生徒たちが自分で意欲を出して自ら勉強するまでになり、今回のような素晴らしい快挙を生んだわけだ。

職業科はどうしても低く見られがちだが、これを打破するため、徹底的に簿記に力を入れ、全国的に有名にした。同科の森均先生は「これが生徒たちに大きな自信を持たせた」という。こうして生徒が自分で意欲を出して勉強するまでになり、今回のような素晴らしい快挙を生んだわけだ。同科では勤労体験学習も取り入れ、独自でリンゴ園をつくるなど教育ぶりはユニークだ。

80周年記念誌より
岐阜日々新聞記事 昭和56年10月4日（岐阜新聞社提供）

益田高校卒業生
公認会計士に

同校初の快挙、
小坂町出身の江原吉一君
後輩にも励み

岐阜日々新聞 昭和56年10月4日（日）
より（岐阜新聞社提供）



初参加の全国高校簿記大会で優勝

見事に実ったリンゴ栽培

老園主に代わり生徒が手入れ



汗の結晶が樹の下で収穫を喜び合う生徒たち—萩原町経理科で

消毒から施肥まで 野外で勤労精神を養う

